

# 早稲田大学 教育学部 日本史 講評

## 〔総合分析〕

出題形式	マーク・記述併用
試験時間	60分
特徴・その他	単なる用語の暗記力ではなく、考えて解く力を試している問題が目立つ。これを養うためには、問題演習よりも先に歴史を深く理解する必要がある。授業を受け身で聴くのではなく、考えながら聴く姿勢でなければならない。

## 〔大問別講評〕

番号	出題内容	コメント	難易度
I	古代の文字の受容	難問は存在しないが、問6・7あたりにつまづいた人は、もっと「時期」にこだわって問題を解く訓練をする必要がある。そのためには学習段階から「時期」を意識していなければならない。それは普通に教科書チェックなどで可能なことだろうか？	易
II	中世・近世の史料	史料(2)が未見史料だが、「重時」自体は有名であるうえにそれほど読解しにくい史料ではないため、問3・4は正解できただろう。やや難しいのは問5。藤原頼経・頼嗣の追放のタイミングを正確に学習していなかった人は悩まされただろう。	やや易
III	江戸時代の出版文化	難問は問4のみ。史料が未見史料なので、空欄A・B・Cでも冷や汗をかかされるが、冷静に読解してヒントを見つければ、結局のところ「答えはこれしかない」となるはずである。	やや易
IV	近代の地主制	難問は問2。「資本主義と小作農」や「資本主義と農村」でも正解のようにも見える。しかし、この正否にこだわるよりももっと重要なのは残りの問題の正否である。本問は「早大日本史の検証」で講義する予定である。	やや易
V	近現代の文学者	問1の1、問3・4はさすがに難問。どれも早稲田では出されやすそうな問題ではあるが、ここまで備えられるのは英語・国語に時間を割く必要のない人だけだろう。もっとこだわるべきは、いろんな大学で出されている基本問題と、意外と出題されているのに知られていないノーマーク問題である。	難